

平尾雅子門下生
ヴィオラ・ダ・ガンバ発表会

2023年9月30日（土）13：30開演
於：聖グレゴリオの家

第 1 部

1. フンク：4本のヴィオラ・ダ・ガンバのための組曲 ニ長調
D. Funck (1648~ca. 1699) : *Stricture Viola di Gambicae Suite D-Dur*
Adagio / Allemand / Air / Sarabande

井上巴奈歌 佐久間純一 橘直貴 井上樹

発表会でいつもお馴染みの内山さんが体調を崩され、コンサートに参加できなくなっていました。来年の発表会は内山さんも一緒に全員で参加したいと思います。

フンクは 1648 年にボヘミアに生まれ、法律、音楽、詩を学び、ガンバ、ヴァイオリン、ギターやクラヴィコードの名手として知られるようになりました。《4本のヴィオラ・ダ・ガンバのための器楽曲集》(1677)は43の舞曲からなり、様々なサイズのガンバでの演奏が考えられる作品が並んでいます。今回はその中からバスガンバ4本で演奏できる曲を選びました。(井上樹)

2. アーベル：ソナタ ト長調
C. F. Abel (1723~1787) : *Sonata G-Dur AbelWV B43*
Moderato / Menuette

宅間かおり (Vdg. 平尾雅子)

この曲が収められているペンブローク・コレクションは、アーベルの弟子、エリザベス・ハーバート・ペンブローク伯爵夫人に献呈されており、4つの無伴奏曲と33曲の通奏低音付きソナタが含まれます。現在は大英図書館所蔵。数年後にまとめられた(第2)ペンブローク・コレクションが、近年になって公表されましたが、そちらはより難易度が高く、彼女の習熟度に合わせて作曲されたと思われます。中には夫でチェロやファゴットを演奏した伯爵との二重奏曲も収録されています。ペンブローク家は1138年に創設され、音楽を保護する家柄として名高く、コプラリオやロウズも出入りし曲を献呈しています。本日の曲は、親しみやすく非常に愛らしい曲で、シンプルながら起伏に富み、軽やかで、弾いていてとにかく楽しいです。(宅間)

3. ロック：2台のバスヴァイオルのための二重奏よりハ短調、ハ長調
M. Locke (1621/22~1677) : *Duos for two bass viols C minor, C major*
Fantazie / Courant / Fantazie / Saraband

山田郁子 森田彰子

英国王チャールズ2世の宮廷作曲家でもあったロックが書いた《2台のバスヴァイオルのための二重奏》は、ニ短調、ニ長調、ハ短調、ハ長調の12曲があり、12曲目のハ長調 *Saraband* の終止線のうしろに「2台のバスヴァイオルのための二重奏はこれまで。1652年」と記されています。どの曲も面白く選曲に迷いました。ハ短調、ハ長調の *Fantazie* は、どちらの曲も冒頭のフレーズが印象的で上下パートの呼応や絡み、テンポの変化が面白く、*Courant* は流れるようなコレンテではなく堂々としたバロッククーラント、*Saraband* はルネサンス風の軽快なテンポで安定した楽しさが感じられます。重音、移弦、スラー、弓の使い方が難しかった箇所もありますが、弓の奥深さを知る事ができました。(山田)

4. ブラヴェ：フルート・ソナタ ニ長調 作品2の5より
M. Blavet (1700~1768) : *Sonate en ré majeur op. 2-5*
La Chauvet : Largo / Les Représ : Minore, tendrement / Fuga : Allegro

Fl. 舟本由美子 Vdg. 松田祥子 (Cem. 加納文子)

ミッシェル・ブラヴェは当時さかんに行われるようになったコンセール・スピリチュエルで活躍し、その演奏はそれまでのフルートの印象を覆す革新的なものだったという記録が残っています。テレマンの《パリ四重奏曲》の初演はブラヴェらにより演奏され、その妙技により人々の耳を異常なほど引き付けたとテレマン自身が伝えています。作品2の5は、1732年に当時仕えていたクレルモン伯爵の愛人ブイヨン公夫人に捧げられています。この曲集はタイトルにイタリア様式とフランス様式の融合を示唆する文が記され、各楽章はイタリア語による指示のほかにフランス語のタイトルが添えられ多楽章で構成されています。今回演奏する3つの楽章のタイトルは、ショーヴェ(趣味でチェンバロを弾く音楽好きの領主の名前)、後悔、フーガです。(舟本)

5. キューネル：パルティータ ニ短調
A. Kühnel (1645~ca.1700) : Partita d-Moll
Preluda / Allemande / Corrente / Sarabande / Giga

橘 直貴 (Vdg. 井上樹 Cem. 加納文子)

アウグスト・キューネルは 1645 年 8 月 3 日に生まれ 1700 年頃に没したドイツの作曲家、ガンバ奏者です。16 歳頃まで音楽教育を受けた後、ザクセン・ツァイツ公モーリッツ宮廷のガンバ奏者を 1681 年まで務め、その後ダルムシュタット、ワイマールやドレスデン、1695 年からはカッセルの宮廷でも活躍しました。今日取り上げるパルティータは、14 のソナタもしくはパルティータとして 1698 年に出版されました。キューネルのパルティータはどれもコンパクトで親しみやすく、ガンバ弾きとしての大事な要素が詰まっています。僕自身これまで常に右手に力が入りぎゅうぎゅうと弦を擦る癖がついており、音には常に実があり過ぎ、拍節感や音のたわみも全く表現できていませんでしたが、今回の発表会を通してしなやかで心地のよい演奏を目指したいと思います。(橘)

6. ブクステフーデ：カンタータ〈主に向かって歓呼せよ〉
D. Buxtehude (ca.1637~1707) : Kantate «Jubilate Domino»

Sop. 佐藤ゆかり Vdg. 渡辺マリ (Vdg. 平尾雅子 Cem. 加納文子)

ブクステフーデはバッハのオルガン曲に大きな影響を与えた事でも有名な作曲家・オルガン奏者です。オルガン曲以外にも 100 曲を超える声楽作品や宗教音楽・世俗音楽などを作曲しました。〈主に向かって歓呼せよ〉は 1672 年頃の作品。アルトパートと同じく技巧的なヴィオラ・ダ・ガンバのソロ演奏が通奏低音の上でコンチェルトのようにかけあう華やかな曲です。ガンバが鳴りやすい調性のニ長調で書かれ、音域は大変広く、ラッパをイメージさせる音型が特徴となっています。2020 年の演奏会に向けて練習していましたが、コロナ流行の年で中止になり演奏できなかつた曲でした。4 年ぶりに再挑戦です！またこの素敵な曲を演奏できる事に感謝して... (佐藤)

Jubilate Domino omnis terra,
Cantate et exsultate et psallite,
Psallite Domino cithara et voce psalmi.
Psallite Domino in cithara.
In buccinis et voce tubae,
Jubilare in conspectus Regis Domini.

全地よ、主に向かって喜ばしき声をあげよ。
声を放って喜び歌え、ほめうたえ。
琴をもって主をほめうたえ。
琴と歌の声ををもってほめうたえ。
ラッパと角笛の音をもって
王なる主の前に喜ばしき声をあげよ。

第 2 部

1. オルティス：無伴奏レセルカーダ第 2 番
ラ・スパーニャによるレセルカーダ第 1 番
パッサメッツォ・モデルノによるレセルカーダ第 2 番
D. Ortiz (1510~ca.1570) : Recercada Segunda (solo) / Recercada Primera sobre La Spagna /
Recercada Segunda sobre Passamezzo moderno

藤崎 広大 (Harp 曾根田駿)

ディエゴ・オルティスは当時スペイン領だったイタリア南部のナポリで宮廷楽長として活動していた作曲家です。今日はオルティスの作品の中からレセルカーダを 3 曲お送りします。1 曲目は無伴奏のレセルカーダで、同じフレーズを繰り返しながら進む即興的な要素の強い曲です。2 曲目は定旋律 La Spagna 上の対旋律で、ゆったりとした曲調で地中海の穏やかな波を感じさせるかのような曲です。3 曲目は舞曲パッサメッツォ・モデルノによるヴァリエーションで、ガンバが賑やかに変奏を繰り返します。(藤崎)

2. マレ：組曲ニ短調（第1巻）

M. Marais（1656~1728）：Suite en ré mineur
Prelude / Sarabande / Rondeau

森田 彰子（Harp 曾根田駿）

マレのヴィオラ曲集1巻の最初の組曲ニ短調には4つのプレリュードがあります。1番目は大曲で、2つの部分からなりますが、2~4番目はさほど長くはありません。今回選んだ4番目は1~3番目のものと趣が異なり、ゆったりとしていて、舞曲にはない様々な要素が含まれています。サラバンドは3拍子の舞曲ですが、これは荘重なフランス風のもので、2拍目に重みがあるサラバンドシンコペーションが見受けられます。ロンドーは、日本の某バイオリンメソッドで「リュリのガヴオット」として取り上げられています。どうしてそんな間違いが起きたのかいろいろ想像されるのですが、誰にとっても親しみやすい曲に違いありません。（森田）

3. マレ：組曲イ短調（第3巻）

M. Marais：Suite en la mineur
Prelude / Grand Ballet

松田 祥子（Vdg. 山根健一 Harp 曾根田駿）

1711年出版のヴィオラ曲集第3巻に収録されたこの組曲は、Grand Balletと題する曲を最後に置き、ダンスの名手であったルイ14世へのオマージュを彷彿とさせます。1715年逝去の王はこの頃既に老いており、プレリュードは最盛期の栄華と威厳とともに、その果ての孤高を思わせます。終曲のグラン・バレは、様々なテーマとそのドゥーブルが、さながら宮廷舞踏会のカップルダンスのように次々と連なり、終盤の王のソロダンスを経て、静かに終幕。というイメージで演奏したいと思います。（松田）

4. マレ：含み笑い、奇妙なアルマンド、アラベスク（第4巻）

M. Marais：Suite d'un Goût Etranger
La Minaudiere / Allemande la Bizare / l'Arabesque

山根 健一（Vdg. 市川雅敏 Harp 曾根田駿）

ヴィオラ小品集第4巻にあるSuite d'un Goût Etranger（異国趣味の組曲）から3曲を演奏します。本組曲は題名の如く異国趣味（一風変わった趣味）に溢れた小品3曲から構成されています。La Minaudiereは、2拍子のソロと3拍子の通奏低音の交差が面白い曲です。また曲中3オクターブ半の音程の跳躍があり、聞き所の一つです。Allemande la Bizareは、こちらも多くの音程の跳躍があり、ソロと通奏低音のリズムの交差があつたりと、不思議な雰囲気のある曲です。l'Arabesqueは、文字通りアラビア風を意味するの装飾的幻想的なことを示すのか定かでは無いですが、美しく親しみやすい旋律でよく知られています。（山根）

5. マレ：組曲ニ長調（第3巻）

M. Marais：Suite en ré majeur
Prelude / La Brillante / Plainte

井上 巴奈歌（Vdg. 井上樹 Harp 曾根田駿）

この組曲には、ニ長調という調性も相まって明るく賑やかな曲が多く並んでいますが、その中で際立って静かな世界観を持つのが「嘆き Plainte」です。Plainteという語は「苦痛、うめき声」といった意を持ち、転じて「嘆くような音や声」を表します。17世紀のある歌唱教則本には「プラントは嘆きの箇所で行われる装飾」と記されているように、嘆きのアフェクトを表現する装飾でもありました。マレはこのタイトルを持つ曲を2つ書いており（もう1曲はト短調）、このニ長調のPlainteは、嘆きというよりもそれを超越したような優しく穏やかな曲調です。エール・ド・クールのようなシンプルな旋律と、その中で紡がれる繊細な装飾には、葛藤や涙が見え隠れするようです。この曲を表現するにはまだまだ人生経験が足りないかもしれませんが、自分なりの表現を模索しました。（井上巴奈歌）

6. ロウズ：ハープ・コンソート 組曲第1番 ト短調
W. Lawes (1602~1645) : Harp Consort no.1 in G minor
Alman / Corant / Corant / Saraband

米山 水浦 (Tr. 渡辺マリ Harp 曾根田駿)

ロウズは英国の作曲家で、43歳の若さで戦死しています。ガンバコンソート曲を多く作曲していますが、この曲はブローケンで、ヴァイオリン、バスガンバ、テオルボ、ハープの楽器指定があります。今回はヴァイオリンパートをトレブルガンバで、テオルボパートは無しで演奏します。

曾根田さんが弾いてくださる3列の弦を持つイタリアのタイプのハープ (Arpa doppia a tre ordini) は、17世紀初頭にイタリアからフランスに渡り、その後、フランス生まれのハープ奏者ジャン・ル・フレルがイングランドに持ち込んだ可能性が高く、ロウズのハープ・コンソートはフレルのために書かれたという説もあります。そのことを踏まえて、テンポやトリル、イネガルのかけ方などフレンチ様式を意識して演奏します。(米山)

第3部

1. シェンク：チャッコーネ
J. Schenck (1681~1767) : Suite F-Dur
Ciaccone

井上 樹 (Vdg. 井上巴奈歌 Cem. 加納文子)

シェンクの曲集《音楽の楽しみ (Scherzi Musicali)》をペラペラとめくりながら弾いて遊んでいた時に特に気に入ったシャコンヌを選びました。この曲集はたくさんの舞曲やソナタからなり、曲のスタイルも英国のディヴィジョンやフランスの組曲、イタリアのソナタなどの様式を取り入れ、難易度も様々で、楽しく魅力的な曲集だと思います。とても長いシャコンヌなので単調にならないように楽しく演奏したいと思います。(井上樹)

2. バッハ：ソナタ 第2番 ニ長調より1、2楽章
J. S. Bach (1685~1750) : Sonate D-Dur BWV 1028
Adagio / Allegro

池部 裕子 (Cem. 加納文子)

レッスンでの平尾先生の言葉「音楽は右手でつくる」。この曲の Adagio では特にその難しさを痛感しています。長い音符のところは音のシェイプを明確にイメージし、弓のスピード・圧力・配分をコントロールする。繊細でごまかしのきかない日本料理をつくる作業にも似ているような気がします。少し夢の中にいるような浮遊感も漂う Adagio、続く Allegro で一気に目覚め、推進力のある流れのなかで二つの楽器が一緒になったり離れたりするのペア (三声ですが) のフィギュアスケートのようにも感じます。

(池部)

3. マレ：組曲 ロ短調 (第2巻)
M. Marais : Suite en si mineur
Prelude / Allemande / Courante / Sarabande / Gigue

市川 雅敏 (Vdg. 山根健一 Cem. 二川陽子)

第2巻は1701年、マレ45歳、リュリの死から14年後の曲集です。ロ短調の組曲は第83~95曲、最終曲はリュリ氏のためのトンボーです。冒頭の前奏曲は、突然の悲報に接した瞬間の驚きと悲嘆を表すかのような「シーレー嬰ファ」の激しい上昇音型で始まります。続く舞曲群はトンボーへと導く組曲形式の前奏のようです。ロ短調の組曲は以降のマレーの曲集にはなく、このトンボーで封印されたかのように。一方、サント・コロンプ氏のためのトンボーのホ短調は、4巻第一部の最終組曲、5巻の最終組曲と続きました。両恩師への思いの違いでしょうか。ちなみに太陽王の死後、マレはクーラントを封印しました。

(市川)

4. バッハ：フルートと通奏低音のためのソナタ ホ長調

J. S. Bach : Sonate für Flöte und Basso Continuo E-Dur BWV1035
Adagio ma non tanto / Allegro / Siciliano / Allegro assai

Fl. 舟本由美子 Vdg. 平尾雅子 (Cem. 加納文子)

バッハのフルート・ソナタとして知られている8曲のうち、彼の真作であるとされているものは5曲と考えられており、BWV1035はそのうちの1曲です。この曲の自筆譜は失われていますが筆写譜に「17××年、作曲者がポツダムを訪れた際に宮廷侍従のフレーデルスドルフのために作曲し、その自筆譜を筆写したもの」と記されています。バッハがポツダムを訪れたのは1741年と1747年の2回と判っていますが、そのどちらが曲の成立年かは特定できていません。しかし1741年はフリードリヒ大王がまだ宮廷をポツダムに移していないことから1747年である可能性が高いと考えられています。そうであれば《音楽のささげもの》と同年のバッハの最晩年に作曲されたということになります。(舟本)

5. テレマン：ヴィオラ・ダ・ガンバのファンタジー第2番 二長調

G. P. Telemann (1681~1767) : Fantasie Nr. 2 D-Dur für Viola da Gamba solo TWV 40:27

和田 達也

《ヴィオラ・ダ・ガンバのファンタジー》の楽譜は既に失われたと考えられていましたが、2015年にレーデンプルク邸で再発見されました。1735年にハンブルクで出版され、Pierre Chaunel (1703~1789)なるハンブルクの高名な実業家に献呈されています。彼がガンバの演奏家であったかについては不明ですが、《ターフェルムジーク》(1733)や《パリ四重奏曲》(1738)等の購読者として記録が残っており、テレマンにとって重要な顧客の1人であったと思われます。Chaunelがユグノー移民の子であったことも、フランスかぶれのテレマンに特別な親近感を覚えさせたのかもしれませんが。ヴァイオリンのファンタジーがそうであるように、ガンバのそれについても、フーガを楽章構成に含んだ作品とギャラント様式の作品が12曲の中に混在しています。今日演奏する2番は後者の作風です。ギャラントの時代はガンバ奏者とチェロ奏者の境界が曖昧になった時期でもあります。今回はこの頃チェロで使われ始めていた親指を使う高ポジションの運指を用いて、終楽章の即興的な演奏に挑戦します！(和田)

6. シェンク：ソナタ第1番 二長調 作品9-1より

J. Schenck : Sonate D-Dur op.9-1
Vivace / Allegro / Adagio / Allegro

堀 あゆみ (Vdg. 平尾雅子 Cem. 加納文子)

J. シェンクは J. S. バッハの少し前の時代にドイツで活躍したオランダ生まれのヴィオラ・ダ・ガンバ奏者です。ガンバ演奏の卓越した才能を認められ1696年にドイツのデュッセルドルフ宮廷楽団ガンバ奏者に任命され、のちに顧問官に就任しました。その地で活躍しましたが、晩年の足跡は分かっています。ヴィオラ・ダ・ガンバのためのソナタ集《ダニューブ河のこだま (Lecho du Danube)》には6曲のソナタが含まれ、この二長調のソナタは第1番目にあたります。1曲目は冒頭の曲に相応しく、二長調の明るく華やかなファンファーレで始まり、万華鏡のように次々と現れるモチーフが折り重なるように入れ替わりながら運ばれます。続く2曲目はリズムカルなフーガで始まり、ソロ声部とバス声部がお互いに呼応し合いながら進むうち、次第に一体となりうねりながら怒涛のごとく締めくくります。うって変わって深い嘆きを切々と歌う3曲目を経て、終曲は典型的なジグです。くるくると動き回るソロ声部をバス声部が支え、やがて遠くに過ぎ去っていき幕がおります。全体を通して当時ヨーロッパで好まれていたイタリア風な構成をとっています。(堀)